

## 「未来基金」活用方策 住民に本当に喜んでい ただける事業を再構築

加藤鉦一議員  
一般質問

7日に行われた鶴岡市議会の一般質問で、日本共産党の加藤鉦一議員は、①市長公約の「10億円規模のまちづくり未来基金」、②地域自治区制度の導入による地域分権について取り上げました。



### 地域要求に応える

問 鶴岡市は合併後、周辺部の急速な人口減少と地域衰退の現実があり、「合併して良くなった」とは言えない状況だ。

市長公約の「10億円規模のまちづくり未来基金」が実現されるなら、その基金を活用して廃止されたサービス  
の復活や、地域要求に応えることができるのではないか。

総務部長 「まちづくり未来基金」は、既存のまちづくり基金をベースに段階的に積み増しできないか検討している。

その活用方法は、基金の運用益の果実によ

る捻出だけでなく、造成の一方で、元本の取り崩しを並行しておこなう「取り崩し型基金」も検討していく。

問 まちづくり基金は現在高3億1264万円だ。旧町村に10億円規模の基金だと40〜50億円が必要だ。

造成する一つの方策として、合併特例債を活用した「地域振興基金」40億円は活用できないか。

総務部長 「地域振興基金」は合併市全体の振興のための基金であり、これを旧町村のみに充てるような手法は適切でない。

問 「未来基金」の活用に住民主体の協議会を設置し、市民の多くの声を集めて、まちづくりの住民の力を引き出せるようにすべきだと思いませんか。

総務部長 地域の住民が主体となつて、基金の活用を契機とした活性化策について、大いに議論し実践することは重要で有意義だ。

そのための住民主体の協議会設置も有効な手法の一つだ。旧町村の支所がその推進拠点となるように、執行体制の強化も市長公約に盛り込まれている。

地域の真のニーズを捉え、住民に本当に喜んでいただける事業を再構築して、そのための財源として、規律を保ちながら、基金を効果的に活用していくことが重要だ。

「旧町村の支所のあり方に関する検討会」を通してさらに検討する。

### 地域分権の検討を

問 旧町村に地域自治区制度の導入による地域分権の検討はされないか。

市長は選挙公約で「自立・分散型の都市デザイン」の確立」を訴えたがどうか。

市民部長 本市は平成25年3月に地域コミュニティ基本方針、28年3月に地域コミュニティ推進計画を策定し進めている。

地域特性を活かしたまちづくりや地域との連携は、地域庁舎の支援体制も含め検討が必要と考えている。

その際地域自治区についても参考にしたい。

## 東郡電気事業ものがたり 東田川郡電気事業の偉大なる軌跡

早坂清輔(上町)

9



電気事業の復元運動を報じる当時の新聞記事

### (復元運動つづき)

この復元運動は、旧公営電気事業者への復元で、東京都議会は、主  
導で「配電事業都市移行  
管期成連絡委員会」が  
組織され、戦後20年以  
上にわたつて政府など  
への折衝が精力的に展  
開された。

本組合は全国組織には加入しなかったが、県内で唯一加盟した酒田市と連携をとり、復元運動が根気強く進められた。

昭和20年11月30日、東田川郡町村長の連名で請願書が国に出され、「配電会社は農村の電気利用に全く認識なく官僚的にして不親切」

「組合に返還し、農村電化を強化して食糧増産、農村工業の発達に資する」と訴えた。東京都や大阪市、仙台市、酒田市など17自治体が昭和30年(1955)1月、陳情書を国に出し、「公営企業として経営し、需要者に必要サービスを提供することが最も適合する形態」と明記した。しかし、9電力会社

体制の電力業界、電産労組、また連合国軍総司令部(GHQ)の反対などで、結局昭和32年(1957)5月、当時の与党自民党3役のあつせんにより、法的な措置ではなく自主的に解決することになった。

復元するための議員提出の法案も審議未了に終わり、いつしか各電力会社と個別の補償要求運動に変わった。本組合では慎重に検討した結果、昭和33年(1958)11月、電気事業を育んできた育英事業に協賛を要求することが最も時宜を得たものと結論した。

東北電力株式会社(旧東北配電株式会社・昭和26年継続)と10数回もの折衝を重ね、ようやく昭和37年(1962)、町村組合の行う育英事業に対し、900万円の賛助金の交付を受け、復元運動は終止符を打つたのである。

なお一緒に運動した酒田市では、市民会館や市庁舎の建設費の一部を得たと言つ。

# 話られぬシベリア抑留

## 新町 齋藤留治

シベリア抑留について講演を聞く機会があった。

抑留された方々は、バイカル湖のある酷寒のシベリアからモスクワ・カザフスタンまで連れて行かれたという。

好条件地域に連れて行かれたのは将校クラスのお偉方(？)、一兵卒はシベリアで鉄道の枕木切りや炭鉱で働かされたという。

今も記憶に残っているが、私が聴講したある教授は授業の合間に「ロシア人一人一人は概ね優しかった、しかしスターリンにはひどい目にあわされた」と。

日本軍の戦陣訓「生きて虜囚の辱めを受けず」と自死した人もいたようだが、「何としても生きて家族の元に帰ろう」と耐えて頑張っていた一兵卒が、ある寒い日、ロシア将兵達が暮らす宿舍の薪割りを終えて、自分達のバラック宿舍に帰ろうとした時に目にした、彼等の生活のひとコマを

次のように書いている。「この極寒の地で、我々俘虜と共に過しているソ連軍将兵とその家族の生活の一端を垣間見る事が出来た。」

そこには何かしら我々抑留者と一脈通じるものが感じられた。彼らの日常生活で目を引いたのは、先ず洗面方法であった。

この厳寒のシベリアでは水は大変貴重なもの、彼らはたったコップ一杯の水で洗面を終わらせるのであった。要領は、まずコップの水を口に含み、その含んだ水を手のひらに移して顔を洗うのであった。

これを器用に2、3回繰り返して洗面を終わらせるのである。



その後朝食を食べるのであるが、黒パンと塩蔵鮭の切り身だけの食事であった。

腹を空かしている私達に悪いと思つたのか、私達の前では食べる事をしなかつた。

…心にホツとしたものを感した。」

シベリアに連れて行かれたのも戦争終結条件「日本の国体護持(天皇制)」に拘つたゆえの事、再び「元首化」なんてまっぴらゴメンと思ひながら私は講演を聞いた。

権、団体交渉権、団体行動権、すなわち労働基本権を保障している。それをもとに、労働組合法、労働基準法、などが定められている。

つまり国は、国民に働く場を与え、労働基本権を保障し、信念や思想で差別してはならないということである。

ところが、東芝は、「扇会」という秘密労働者監視組織をなんと1960年代後半からつくっていた。組合運動をする労働者を尾行・監視し私生活を調べ、会社に批判的な労働者を差別・排除しているという。このように、も

社に批判的な労働者を差別・排除しているという。このように、もの言う労働者の排除は他の大企業にも広がっている。

新憲法下でも、占領下という名目で日米の政府は、物言える職場をつくらうとした労働者の首切り、レッドパージを行った(1949年から)。公務員、民間企業、教員など3万人以上が職場を奪われたのである。憲法違反として、今なお全国で裁判が行われている。



### たいがいにせー

飛んでいる最中に窓

が外れて落ちるナンテ事は、あつてはならないことでしょう。それが体育の授業中の子供の傍というんだから、

「危険」・「不安」・「またか」・「負担の軽減ではないだろう」・「沖縄から出ていけ」となるのは当然だろう。

▲全国でこういう声を上げ、代表して沖縄の知事の声がマスコミに出る。この時・官房長官がテレビに出る。しかし、国民の命を守る

と言う政府が、米国の怒りの声を発したとは言っていない。瞬時に怒つてもいい状況ですよ。一週間前・沖縄の最高責任者が謝りに来たばかりなんだぜ。

▲飛ぶものが墜ちたとは、何回続いたか。そのたび、原因も対策もはつきりしないまま、

従前どおり飛ばせる。国民が納得できない状況の言い訳でも、政府は認める・というのがこれまでの状況だ。

▲なんでこんなに卑屈なんだ。恐ろしさに叫ぶ子供ら・怒る住民の声をなんと見ているのか。日本政府や・たいがいにせーや・というのが国民の声だぜ。

▲こんな事件の二ユーアスで、現場確認に日本の警察が入ったことを「異例なこと」とNHKはいつている。異例の意味はなんだ。なるほど米軍機などの事故などで日本の警察が入ったのは初めてだ。今までの事件で日本の警察が入れなかったのが異常なんだから、別の言い方がないのかよ・とNHKに言いたいね。

▲政府の、アメリカに大きな声ではものも言えない姿勢に付度ですか。だったら、代わりに大声で言えたい。たいがいにせーや・と。(石川)

2017年12月17日号 しんぶん 赤旗 日曜版

### 出羽三山の麓

山形県出羽市三山町の麓に、かつては多くの人が住んでいた。現在は、山形県立三山高等学校が建ち、その周囲には、静かな住宅街が広がっている。

### 守られ残る「黒川能」

黒川能は、山形県出羽市三山町に伝わる伝統芸能。かつては、村の祭りに合わせて行われていたが、現在は、観光客の増加に伴って、年々盛んになっている。

黒川能の舞台は、村の中心にあり、観客は、芝居の傍らに座る。黒川能の特色は、独特の音楽と、美しい舞臺美術にある。

黒川能の歴史は、古くからある。かつては、村の祭りに合わせて行われていたが、現在は、観光客の増加に伴って、年々盛んになっている。

黒川能の舞台は、村の中心にあり、観客は、芝居の傍らに座る。黒川能の特色は、独特の音楽と、美しい舞臺美術にある。

黒川能の歴史は、古くからある。かつては、村の祭りに合わせて行われていたが、現在は、観光客の増加に伴って、年々盛んになっている。

「黒川能」が赤旗日曜版12月17日「たび」欄に掲載。